

「断尾とバターの約束」

—2 稿—

2026/3/24
雨森 れに

〈人物表〉

あるが
有賀 啓晶

(27) ペンションオーナーの息子

バトルル

(33) 従業員。在日歴6年のモンゴル人

1. ペンション・啓晶の私室（朝）

ペンション内にあるオーナー家族専用の私室。壁には有賀啓晶（27）の写真が複数貼ってある。

どの写真にも必ずサモエド犬のホルンがいる。次に多いのはモンゴル人・バトール（33）との写真である。

アラーム音。

啓晶、目を覚ます。

2. ペンション・外観（朝）

一面の雪景色。風がなく、朝日に雪が輝いている。スキー場近くのペンション「アルガ」。

入り口の歓迎看板には何も書かれていない。

3. ペンション・管理室（朝）

ストーブがついているが、誰もいない。

啓晶 「ホルン？」

啓晶、見渡して首を傾げる。

作業台の下など覗く。

部屋の隅にあるエサ入れを確認。エサが入ったまま。

啓晶、また首を傾げ、部屋を出る。

4. ペンション・駐車場（朝）

止まっている車は一台のみ。先ほど着いた様子。

啓晶、ペンションの裏側へ。

5. ペンション・倉庫・外（朝）

大型の倉庫。

啓晶、扉を開ける。

6. ペンション・倉庫・内側（朝）

キンと冷えた倉庫。

バトール、小型斧を振り上げている。

啓晶の声 「ホルン！」

斧は死んだホルンの尻尾へ。
鈍い音がし、白い毛が舞う。

× × ×

啓晶、ホルンに顔を埋めている。
手にはホルンの切られた尻尾。

啓晶 「やっていいことと悪いことがある」

バトルル、困り顔。

バトルル 「ホルンはちゃんと仕事した。だから尻尾を切らなきゃいけない」

啓晶、顔をあげる。

啓晶 「意味がわからない。死体を痛めつけちゃ駄目だろ。普通に考えてさ。おかしいでしょ？」

バトルル 「ケイドウ、聞いて」

啓晶 「死んだのは悲しいよ。だけど、こんな風にされたことのほうが、悲しい。わかる？」

バトルル、静かに頷く。

啓晶、ホルンを抱き寄せ、撫でる。

呟くように、

啓晶 「きれいなままで、きちんとしてやりたかったのに」
バトルル、啓晶の隣に座る。

バトルル 「ごめん。先に聞けばよかった」

啓晶 「何を」

バトルル 「ここでは、死んだらどうする？」
バトルル、真剣な表情。

啓晶、悔し気に、

啓晶 「モンゴルでは、どうすんだよ」

バトルル 「祈る。次は人になれるように」
と、ホルンを愛しげに撫でる。

バトルル 「犬は動物。仕事をしないと家族になれない。人なら仕事しなくても家族。ホルンは頑張った。次は人になれた

らしい」

啓晶 「尻尾は？」

バトルル 「尻尾がある人はいない」

啓晶、怒りを口に出そうとするが留まる。

バトル、真剣な表情のまま啓晶を見つめている。

啓晶、宙を仰ぎ、息を吐く。

啓晶 「日本は、死体を傷つけない。かわいそうだから。それで、埋めるか燃やす。あとは悲しんで終わり、かな」

バトル、何度も頷く。

啓晶の表情を見て、悲しそうな顔をする。

バトル 「自分はホルンのためを思った。でも、ケイドウのためじゃなかったね。ごめん」

啓晶、首を振る。

啓晶 「俺もモンゴルのこと知ってたら同じことしたと思う。だから、いいよ」

バトル 「よかったら一緒に祈る？」

と、ジャケットの内側からバターの箱を取り出す。

啓晶 「どういうこと？ まさか」

啓晶、ホルンを隠すようにして警戒。

バトル、慌てて手を振る。

バトル 「ホルンがこれから食べ物に困らないようにだよ。口にくわえさせる」

啓晶 「モンゴルにもそういう概念あるんだ」

バトル、微笑む。

バトル 「自分はバターが好きだから、前は犬だったと思う」

啓晶 「バターのバター茶、おいしいもんな」

啓晶、つられて微笑む。

啓晶 「モンゴルみたいにしよう」

バトル 「尻尾、バター、あとは丘の上で腐らせる」

啓晶 「腐らせるのはつらいかも……」

バトル 「うん。ケイドウの気持ち、大切にするよ」

啓晶、ホルンに視線を落として、

啓晶 「バトル、さっきはごめんな。俺——」

バトル、遮って、

バトル 「いいよ。問題ない。それより」

と、バターの箱をどうする？と掲げる。

啓晶、手を伸ばす。

7. 雪原（朝）

倉庫から少し離れた場所。

啓晶とバトールが歩いている。

ふたりは赤いソリを引いており、そこにはホルンが寝かされている。ホルンの足元には雪とバターの箱。

啓晶 「なんでバター溶けてんだよ」

バトール 「すぐお茶になる」

啓晶、うんざりした顔。

ふたりは小高い丘を指す。

足とソリの跡を残しながら。

8. 丘（朝）

スキー場から離れた場所。

頂上には木が数本。風が雪を散らす。

啓晶、木の根元にホルンを置く。

線香に火を点けようとする。

が、風に煽られうまく点かない。

諦めて、バターの箱を取り出す。

バトール、箱を受け取る。

バターを一口サイズに切る。

ホルンの口にくわえさせ、囁く。

バトール 「幸せが待ってる」

啓晶、ホルンの上に尻尾を置く。

バトール、頷く。

啓晶 「でもさ。人になって本当に幸せかな」

バトール 「ケイドウ、これは難しい。ホルンは犬でも幸せだった

から」

啓晶 「でもモンゴルの考え方だよ」

バトール 「犬の幸せ。人の幸せ。それぞれ違う。でもこうやって

話せるのはとても幸せ。そうだよ、ドウ」

※ドウハハミ モンゴル語で弟

バトール、啓晶の胸を拳で叩く。

啓晶、受け止め、バトールの胸を同じように叩く。

ふと、空を見上げる。冬の青空である。

9. 回想・丘(昼)

夏の青空。

丘は植物に覆われている。

緑の中を駆ける白い犬。ホルンである。

ホルン、止まってこちらを見る。

黒い瞳と鼻が呼んでいるかのよう。

啓晶、走り出す。

ホルン、啓晶に飛びつく。

啓晶、倒れる。

ホルンに舐めまわされる。

(回想終了)

10. 丘(昼)

啓晶、視線を下へ。

雪の上で動かないホルン。

啓晶、ホルンを撫で、ゆっくりと抱きしめる。

バトール、静かに見守る。

啓晶 「話せれば幸せ、か」

バトール 「わかりあえる」

啓晶 「言葉がなくても、わかりあってたつもりだよ」

バトール 「それもわかる」

啓晶、立ち上がる。

バトールに顔を見られないように背を向け、

啓晶 「でも、ホントのところはホルンに聞かなきゃわかんない

もんな」

鼻水をすすする。

バトール、啓晶の肩を強く抱く。

バトール 「ホルンはずっと幸せだ。これからも」

11. ペンション・管理室(昼)

バター茶を飲む啓晶とバトール。

ふたりは窓の外を静かに眺めている。

おわり